基礎看護学（基礎看護学領域）

１－１　構成員

平成29年3月31日現在

教授	1人	
病院教授	0人	
准教授	1人	
病院准教授	0人	
講師（うち病院籍）	0人	（0人）
病院講師	0人	
助教（うち病院籍）	2人	（0人）
診療助教	0人	
特任教員（特任教授、特任准教授、特任助教を含む）	0人	
医員	0人	
研修医	0人	
特任研究員	0人	
大学院学生（うち他講座から）	8人	（1人）
研究生	0人	
外国人客員研究員	0人	
技術職員（教務職員を含む）	1人	
その他（技術補佐員等）	0人	
合　　計	13人	

１－２　教員の異動状況

片山　はるみ（教授）（H24.4.1～現職）
鈴木　美奈（准教授）（H23.7.1～H25.3.31助教；H25.4.1～現職）
村松　妙子（助教）（H20.9.1～H25.3.31 教務補佐員；H25.4.1～現職）
青木　好美（助教）（H26.4.1～H28.3.31教務補佐員；H28.4.1～現職）
原田　大輔（教務補佐員）（H28.4.1～現職）

２ 講座等が行っている研究・開発等

1	（1）研究・開発等のテーマ名
	コンピテンシー・モデルに基づく看護職者のための倫理学習プログラムの開発と評価
	（2）研究・開発等の背景、目的、内容の概略
	現在我が国の看護職者は様々な倫理的問題に直面している。ところが、その倫理的問題に対処するための実践力が不十分であるうえに、対処できないことで苦悩する看護職者も多いことから、これらの課題に応えうる教育プログラムの開発は喫緊の課題となっている。本研究の目的は、エビデンスが確かで評価システムと一体となっている、倫理的コンピテンシー・モデルに基づいた、また学習者のニーズにも沿った、看護職者のための倫理学習プログラムを開発、実行、評価することである。看護職者の倫理的問題に対する実践力が向上することは、看護ケアの質の向上につながるだけではなく、多職種協働のチーム医療の推進にも寄与する。また、これまで曖昧であった看護職者の倫理的な実践力の具体的な内容を行動レベルで明確に示すことも可能となる。 研究１：ハイパフォーマー看護職者へのインタビュー調査を行い、質的内容分析によって看護職者の倫理的コンピテンシー・モデル原案を作成する。 研究２：作成したコンピテンシー・モデル原案をデルファイ法によって精選し、学習者のニーズ調査等も加味して看護職者のための倫理学習プログラムを開発する。 研究３：学習プログラムを実行・評価しつつ、プログラムの学習効果とコンピテンシー・モデルの評価票としての信頼性・妥当性、有用性を統計学的に検証する。
2	（1）研究・開発等のテーマ名
	回復期リハビリテーション看護コンピテンシー評価票の統計学的検証
	（2）研究・開発等の背景、目的、内容の概略
	回復期リハビリテーション（以下「回リハ」とする）看護の専門性を明らかにし、根拠に基づいた教育プログラムの構築と職能評価、また多職種協働の推進に役立てるため、回リハ看護コンピテンシー評価票を統計学的に検証することを目的とした。全国から無作為抽出された22病院の回リハ病棟に勤務する1,016名の看護師を対象に無記名自記式質問紙による横断調査を実施した。質問紙は基本属性、10コンピテンシーに付帯する80の行動特性から成る回リハ看護コンピテンシー評価票、そして4下位尺度を有する看護における社会的スキル尺度短縮版より構成した。80項目の回答をコンピテンシー毎に平均値の順に並べてA～Dの難易度を設定した。コンピテンシー毎の合計をコンピテンシー得点とした。コンピテンシー得点について、基本属性による差の検定、看護における社会的スキルとの相関を、またA～Dの難易度については分散分析で検証した。回リハコンピテンシーの評価票としての信頼性と妥当性が概ね確認された。今後は実用化に向けて評価基準を設定する予定である。評価票の使用により、根拠に基づいた教育プログラムの構築と職能評価、また多職種協働の推進が見込まれる。
	（3）前年度までの状況
	回リハ看護の専門性を明らかにし、根拠に基づいた教育プログラムの構築と職能評価、また多職種協働の推進に役立てるため、回復期リハビリテーション（以下「回リハ」とする）看護コンピテンシーは何かについて明らかにした（大学院生：松本志保子）。この内容は今年度国際学会で発表した６－２）。
	（4）当該年度内の進捗
	前年度の成果を論文にし、現在印刷中である。またそれに引き続き、「回復期リハビリテーション看護コンピテンシー評価票」を作成してその信頼性と妥当性を検証した。これを日本看護管理学会で発表予定である。
	（5）翌年度の方針と予想
	本テーマの論文が公表に至るべく査読中である。
	（1）研究・開発等のテーマ名
	タブレット端末による動画撮影を通した無菌操作技術の学習効果の検討
	（2）研究・開発等の背景、目的、内容の概略
	看護技術習得においては、看護技術を身に付けるだけでなく、看護学生が自ら技術習得に向け取り組める能力を兼ね備えることが必要である。反復練習の中で学生が自分の技術に対して的確な自己評価を行い、改善点を見出す力が必要である。本研究は感染予防技術において、教員による他者評価と学生による自己評価との差をみることで、学生同士でのタブレット端末による動画撮影が的確な自己評価へとつながるかどうか検討することが目的である。

3	（3）前年度までの状況
	「滅菌手袋の装着方法」の技術を通して、学生による自己評価と教員による他者評価の差をタブレット端末使用した群としていない群とで比較検討した。どちらの群も自己評価得点が高く、効果的な振り返りに結びついていない可能性が示唆された。（第36回日本看護科学学会学術集会にてポスター発表）
	（4）当該年度内の進捗
	「滅菌物の取り扱い」の技術に焦点をあて、学生による自己評価と教員による他者評価の差だけでなく、成人用メタ認知尺度得点についてもデータを得た。また、前年度の研究において、技術の教示の仕方が効果的でない可能性があったため、教員によるデモンストレーションをおこなってから行った場合についてもデータを得た。現在、データの解析中である。
	（5）翌年度の方針と予想
	上記のデータ解析をもとに、より的確な自己評価へとつなげられる教育プログラムを計画し、1群あたりの対象人数を増やして検討する予定である。
4	（1）研究・開発等のテーマ名
	バイオフィルム形成モデルの確立及び看護ケアにおけるカテーテル関連感染予防の検討
	（2）研究・開発等の背景、目的、内容の概略
	厚生労働省老健局の2011年の調査によると、「可能な限り住み慣れた地域・自宅で最期まで暮らし続けたい」というのが国民の多くの願いであることが示されている。また、2012年度の診療報酬改定でも在宅医療重視の方向性が示され、現在の高齢化社会とあわせてみても、今後ますます在宅医療は増加していくことが予想される。加えて、感染対策防止加算の見直しも行なわれ、地域の医療機関同士の連携による感染対策の推進を重要課題として提示している。このように在宅医療が進めば、在宅において経管栄養や気管内吸引といった医療行為を行うことも少なくない。また、地域における感染対策の重要性がうたわれていても、在宅においては栄養チューブや吸引チューブを複数回使用することは、感染リスクはあるもののコストの面から考えると避けることが難しいのが現状である。在宅で療養をおくる、特に高齢者の方たちに対し、これらのチューブ管理をより身近なもので、より簡単に行える方法を提供することは安全な在宅療養へとつながると考えられる。ヒトの慢性の細菌感染症、特にカテーテル等の医療器具関連感染の多くは、弱毒菌が主体のバイオフィルムが関連しているが、バイオフィルム中の細菌に関しては抗菌薬や消毒薬が効きにくいことも知られている。本研究では、日頃から患者と関わることの多い看護師が行う看護ケアを通して、バイオフィルムが関連する感染症を予防するための細菌除去に有効な方法について検討することを目的とする。
5	（1）研究・開発等のテーマ名
	看護学生の倫理的感受性に関する研究
	（2）研究・開発等の背景、目的、内容の概略
	近年の医療の高度化、複雑化、患者の権利意識の高まりから、看護師は臨床現場で日常的に倫理的問題に遭遇していると言われている。その為看護師は高い倫理的実践応力が求められており、看護学生においても倫理的能力の育成が求められている。倫理的行動の基盤として、その場の倫理的問題に気が付く能力である倫理的感受性が注目されている。看護師の倫理的能力を測定する尺度としては様々な尺度が見られるが、看護学生を対象とした妥当性・信頼性が得られた尺度はみられない。そこで、学生の倫理的感受性を測定しうる尺度の開発および信頼性妥当性の検証をおこなうこと、さらに看護倫理教育における示唆を得る目的で本研究を行った。
	（1）研究・開発等のテーマ名
	自殺未遂患者および自傷患者に対する看護師の態度について

6	（2）研究・開発等の背景、目的、内容の概略
	背景：日本の自殺者数は1998年以降3万人を超え、2012年には14年振りに3万人を下回ったものの、国際的にみても、今なお我が国の深刻な社会問題である。自傷行為の既往は自殺未遂を起こす危険因子として考えられており、救急現場において自傷患者は自殺未遂患者と同様の対応が必要とされている。自殺未遂患者に対する好ましい看護師の対応とは共感的態度でかかわり、再自殺のリスクアセスメントとして希死念慮を確認することであると考えられている。しかし、看護師は自ら死を選んだ患者の傷を手当てすることや命を助けることに対してジレンマを感じ、反感や否定などの陰性感情を持ちやすい。このことから、看護師が自殺未遂患者に対応する際、共感的態度と陰性感情によるアンビバレントな状況に陥る可能性があり、患者とのかかわりに困難を感じることがうかがえる。 **目的**：以下の3つを目的とした。イギリスで開発された自傷患者に対する反感態度尺度の日本語版（Self-Harm Antipathy Scale Japanese version:SHAS-J)の信頼性と妥当性を検討する、希死念慮を持っている可能性がある自殺未遂患者にケアを提供する救急業務に従事する看護師の現状を明らかにする、全国の救命救急センターの自殺未遂患者に対する看護の実態と患者に対する看護師の態度を希死念慮の確認に焦点を当てて明らかにする。 **内容の概略**：全国の救命救急センターの看護師を対象に無記名自記式質問紙調査を行った。SHAS-Jは、Cronbach α係数により信頼性が、共感的コーピング尺度と看護師の感情労働尺度との関連により妥当性が概ね確認された。また、救急業務に従事する看護師が自殺未遂患者に対してケア遂行を促進するためには、看護師の知識の向上、ケアするための環境調整、看護師のサポートの充実の3点が必要であることが明らかになった。さらに、比較的多くの看護師（68.2%）は自傷患者に対して希死念慮を確認しており、希死念慮を確認している看護師は自傷行為に対して反感が低く、共感的態度を示していた。
	（3）前年度までの状況
	以下、浜松医科大学修士論文を執筆した。 水嶋好美：救急看護師における自傷患者とのかかわり方と精神的健康，浜松医科大学，2015. 以下、国内学会（日本看護科学学会）で発表した。 水嶋好美，片山はるみ：自傷行為に対する反感の態度尺度の日本語版の信頼性と妥当性の検討，第35回日本看護科学学会，2015.
	（4）当該年度内の進捗
	以下、論文を執筆し原著論文として国内学会誌（日本看護科学会誌）に掲載された。 青木好美，片山はるみ(2016)：自傷行為に対する反感態度尺度の日本語版の信頼性と妥当性，日本看護科学会誌，日本看護科学会誌，36，255-262. . 以下、国内学会（日本看護科学学会）で発表した。 水嶋好美，片山はるみ：看護師の自傷行為に対する反感の態度に関連する要因，第36回日本看護科学学会，2016.
	（5）翌年度の方針と予想
	以下、原著論文として国内学会誌（日本看護科学会誌）に掲載される予定である。 青木好美，片山はるみ(2017)：救急業務に従事する看護師の自殺未遂患者に対するケア遂行の現状，日本看護科学会誌，（印刷中）. 国際学会（2018INC＆EADONS）で発表する予定である。

3　論文，症例報告，著書等

	平成28年度
（1）原著論文数（うち和文のもの）	1編　（　1編　）
そのインパクトファクターの合計	0.000
（2）論文形式のプロシーディングズ及びレター	0編
そのインパクトファクターの合計	0.000
（3）総説数（うち和文のもの）	1編（　1編　）
そのインパクトファクターの合計	0.000
（4）著書数（うち和文のもの）	0編　（　0編　）
（5）症例報告数（うち和文のもの）	0編　（　0編　）
そのインパクトファクターの合計	0.000

（1）原著論文

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

	筆頭著者, 共著者: タイトル, 雑誌名, 巻, 初頁ー終頁, 掲載年.	IF
1.	青木好美、片山はるみ:自傷行為に対する反感態度尺度の日本語版の信頼性と妥当性. 日本看護科学会誌. 36. 255-262. 2016	0.000

論文数(A)小計 1 うち和文 1 IF小計 0.000

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

論文数(B)小計 0 うち和文 0 IF小計 0.000

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの

論文数(C)小計 0 うち和文 0 IF小計 0.000

（3）総説

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

	筆頭著者, 共著者: タイトル, 雑誌名, 巻, 初頁ー終頁, 掲載年.	IF
1.	片山はるみ: あなたにもわかる産業ストレス研究, 産業ストレス研究, 23(2), 55-59, 2016.	0.000

総説数(A)小計 1 うち和文 1 IF小計 0.000

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

総説数(B)小計 0 うち和文 0 IF小計 0.000

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの

総説数(C)小計 0 うち和文 0 IF小計 0.000

4－1 特許等の知的財産権の取得状況

	平成28年度
特許等取得数（出願中含む）	0 件

4－2 薬剤、医療機器等の実用化、認証、承認、製品化、販売等の状況

	平成28年度
実用化、認証、承認、製品化、販売数	0 件

5 医学研究費取得状況

	平成28年度	
	件 数	金 額（万円未満四捨五入）
（1）科学研究費助成事業（文部科学省、日本学術振興会）	5 件	129 万円
（2）厚生労働科学研究費	0 件	0 万円
（3）日本医療研究開発機構(AMED)による研究助成	0 件	0 万円
（4）科学技術振興機構（JST）による研究助成	0 件	0 万円
（5）他政府機関による研究助成	0 件	0 万円
（6）財団助成金	0 件	0 万円
（7）受託研究または共同研究	0 件	0 万円
（8）奨学寄附金	0 件	0 万円

（1）科学研究費助成事業（文部科学省、日本学術振興会）

1.	片山はるみ　基盤C（一般）「コンピテンシー・モデルに基づく看護職者のための倫理学習プログラムの開発と評価」、平成27年度～平成30年度、研究代表者	30万円
2.	鈴木美奈　挑戦的萌芽研究 「バイオフィルム形成モデルの確立及び看護ケアにおけるカテーテル関連感染予防の検討」、平成27年度～平成28年度、研究代表者	50万円
3.	村松妙子　若手研究(B) 「看護学生の倫理的感受性測定尺度の開発」、平成25年度～平成28年度、研究代表者	24万円
4.	片山はるみ（分担）, 基盤研究C, 終末期がん患者の在宅療養移行を促進するジェネラリストナース教育プログラムの開発, 平成27年度～平成29年度,（研究代表者）京都府立医科大学医学部准教授 吉岡さおり	20万円
5.	村松妙子（分担）, 基盤研究(C), コンピテンシー・モデルに基づく看護職者のための倫理学習プログラムの開発と評価, 平成27年度～平成30年度,（研究代表者）基礎看護学 片山はるみ	5万円

6　大型プロジェクトの代表，総括

7　学会活動

	（1）国際学会	（2）国内学会
1）基調講演・招待講演回数	0 件	1 件
2）シンポジウム発表数	1 件	0 件
3）学会座長回数	0 件	0 件
4）学会開催回数	0 件	0 件
5）学会役員等回数	0 件	1 件
6）一般演題発表数	1 件	

（1）国際学会等開催・参加

2）国際学会・会議等でのシンポジウム発表

1. Taeko Muramatsu.Study of sensitivity among nursing students.The 16th Hamamatsu-Kyungpook joint medical symposium, 2016.

6）一般発表

6-2）ポスター発表

1. Katayama H, Matsumoto S, Kamata Y, Negi K, Suzuki T, Aoki Y, Sato Y, Suzuki M, Muramatsu T: The Competencies of Nurses Engaged in Recovery Rehabilitation Nursing in Japanese Hospitals, The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars, 2017, in Hong Kong.

（2）国内学会の開催・参加

1）学会における特別講演・招待講演

1. 片山はるみ、特別講演「看護師の倫理的ジレンマ」、第91回日本脳神経外科学会中部支部学術集会第38回中部脳神経外科看護セミナー、アクトシティ浜松コングレスセンター、平成28年9月17日

5）役職についている国内学会名とその役割

1. 片山はるみ：日本描画テスト・描画療法学会　理事

8　学術雑誌の編集への貢献

	（1）外　国	（2）国　内
学術雑誌編集数（レフリー数は除く）	0 件	0 件

（3）国内外の英文雑誌のレフリー

1. 1回：Japan Journal of Nursing Science

9　共同研究の実施状況

	平成28年度
（1）国際共同研究	0 件
（2）国内共同研究	2 件
（3）学内共同研究	1 件

（2）国内共同研究

1. リハビリテーション看護に従事する看護師のコンピテンシー、すずかけセントラルホスピタル看護部長（訪問共同研究員）、論文投稿中

2. 片山はるみ（分担），基盤研究C，終末期がん患者の在宅療養移行を促進するジェネラリストナース教育プログラムの開発，平成27年度～平成29年度，（研究代表者）京都府立医科大学医学部准教授 吉岡さおり

（3）学内共同研究

1. 片山はるみ　基盤C（一般）「コンピテンシー・モデルに基づく看護職者のための倫理学習プログラムの開発と評価」、平成27年度～平成30年度、研究代表者

10 産学共同研究

	平成28年度
産学共同研究	1 件

1. 共同研究「唾液分析の看護学への応用」、浜松ホトニクス株式会社、2017年3月31日まで。
代表者：基礎看護学講座　片山はるみ、分担者：基礎看護学講座　鈴木美奈

11 受　賞

12 新聞，雑誌，インターネット等による報道

1. 9月25日（静岡新聞）、10月23日（静岡新聞、SBSラジオ）：浜松医科大学公開講座2016，知ることからはじめる健康生活，医療チームにおける看護師の役割―看護師の仕事いまむかし―：身体拘束に焦点をあてて

13 その他の業績

1. 担当の大学院生は国内学会で1回以上発表している。修了生の多くが専門誌に投稿し、論文が掲載されている。